

論文の内容の要旨

論文題目

アメリカ合衆国と中国人移民－歴史のなかの「移民国家」アメリカー

氏名 貴堂嘉之

(要旨)

19 世紀中葉のゴールドラッシュを契機に、清朝統治下の広東から中国人の一団が太平洋を渡りサンフランシスコへと上陸した。アメリカ西部へと流入した中国人は、まもなく白人労働者による激しい排斥運動に直面し、中国人移民の存在は、その後の 20 世紀転換期までアメリカ社会では「中国人問題」と呼ばれ、深刻な社会問題であり続けた。連邦議会で 1882 年に制定された「排華移民法」は、自由移民の原則を堅持してきたアメリカ政府にとって、特定国籍の移民を対象とした最初の移民制限立法であり、以後、中国人は「帰化不能外国人」として<アメリカ人>の境界の埒外に置かれることとなった。本研究の目的は、この中国人移民の受け入れから入国制限・禁止にいたるアメリカ政府の移民政策の変容過程と、受け入れ社会における排斥運動の発生からその鎮静化までの歴史的過程を分析し、南北戦争・再建期を含む 19 世紀後半のアメリカ政治、アメリカ社会における「中国人問題」の歴史的意義を検証することである。

これまでのアメリカ移民史では、ヨーロッパ系移民の歴史が軸に据えられアジアからの移民は圧倒的に周縁化されてきた。だが本研究では、19 世紀後半の「中国人問題」への対応を通して、アメリカが初めて国家として移民行政の仕組みを整え、<アメリカ人>とは誰で、<アメリカ人になれない外国人 Alien Ineligible for Citizenship>とは誰かを定義していく国民化の政治を本格化させたことを明らかにし、未熟ながらも近代的監視の出入国管理システムを備えた移民国家アメリカが誕生する上で「中国人問題」が決定的な役割を果たしたと論じた。

それゆえ、本研究は狭義の移民排斥研究ではなく、黒人奴隷解放によりアメリカの政治秩序が

激変する時代の〈アメリカ人〉の境界をめぐる包摂と排除のポリティクスにいかに関わったのかを問う国民国家形成に関する研究である。

序論では、アメリカの「国民の物語」に組みこまれた「移民」概念やその分析概念を批判的に検討し、「長い 19 世紀」を分析する際には、自由移民のみを特権化せず、奴隷や契約労働者など不自由な人流を含めて統合的に検証することが必要だとして、人の移動のグローバル・ヒストリー・モデルを提示した。これまで移民史と黒人奴隷史は分断され議論されてきたが、ここでは奴隷制廃止と移民奨励策、中国人苦力の海外流出の連関性に注目した。アメリカをア priori に移民国家とする神話化された「移民物語」には依拠せず、アメリカが奴隷国家からいかにして「自由」労働者からなる移民国家へと移行していったのかを歴史的に検証した。また、分析視角として「帰化」の法律に着目し、帰化申請権を「自由な白人」のみに限定した 1790 年帰化法が再建期の政治において争点化し「帰化不能外国人」が誕生する過程を追い、20 世紀転換期までを三ラウンドに分けて同時代の国民化と人種化の政治を検証した。

史料としては連邦議会議事録および外交文書を中心的な史料とし、排華運動の分析では州議会議事録や連邦や州の中国人移民調査報告書、現地の主要新聞、各種労働組合の綱領などを用いた。また、共和党系新聞『ハーパーズ・ウィークリー』に掲載されたトマス・ナストの風刺画を再建期政治史と移民排斥研究の史料として用いた。

本書は二部構成で、第一部では 19 世紀中葉の移民開始から 1882 年排華法の制定までを扱い、第二部では排華法制定後、20 世紀初頭に排華運動が鎮静化するまでを扱った。

第一章では、中国人移民の送出地である広東を取り巻いていた国際環境・ローカルな環境を整理し、中国からの人口流出をグローバルな人の移動史の中に位置づけた。苦力貿易と世界的な奴隷廃止運動との関係を問い、「苦力」と「奴隷」、「移民」の異同について考察した。また、次章以降の両国間の条約交渉や排華国内法の制定過程に深くコミットするアメリカ側では門戸開放推進派の宣教師・貿易商・外交官、中国側では清朝の伝統的な移民観を見た上で、公使としてアメリカに渡った出使アメリカ大臣ら関連諸主体について押さえた。

次に、第二章ではアメリカに舞台を移して、サンフランシスコにて排華運動が盛んとなった理由を検証した。従来は、中国人とアイルランド系労働者の雇用競合に焦点が当てられ経済的動機が強調されてきたが、ここでは 19 世紀後半に「即席都市」として急速な発展を遂げた同市の歪んだ発展にその原因を求め、ビッグ四らの市のエリート層に対峙する労働民衆の存在、西部特有の白人中心の人種主義的な政治文化、圧倒的な男性社会として誕生した同市のジェンダー・セクシュアリティをめぐるポリティクスの関与を明らかにし、排華暴動の具体的な分析を行った。

第三章では、中国人移民問題が連邦レベルでの問題となる 1860 年代後半以降の連邦政治を考察した。南北戦争後の共和党急進派による人種平等を希求する諸改革のなかで、中国人移民を国民の境界内に包摂しようとする動きがどう進行したのか、またそうした共和党政治への反動から再建期の政治文化が変容し一転、排華法制定へと至る道程がいかに関わったのかを考察した。また、清末の外交政策を李鴻章らの動きを中心に検討し、米中の内政・外交両面から排華移民法制定に至る過程を解明した。

また、第四章では中国人移民表象を扱い、視覚的史料を分析した。再建期にナストが描いた風刺画を用い、〈アメリカ人〉の境界をめぐるポリティクスを法制度分析では浮かび上がらない、歴史のなかの想像力に着目しつつ検証した。そこではナストが戦後混乱期に意図的に家族共同体的で、かつ人種の境界を越えた兵士共同体的な国民像を創出し、逆に民主党側が「人種混交」

の物語でセクシュアルな不安を喚起することで「白人の統治」をスローガンとしていた。

第二部では、1882年の排華移民法制定がその後、連邦法として再強化される過程を、移民管理の技法として写真付き身分証の携帯など、20世紀のアメリカ移民行政の原型をなす施策が「中国人問題」から制度化されるさまを明らかにした。

第五章では、1885年のアメリカ史上最大の中国人移民虐殺事件(ロックスプリングズ暴動)を扇動したとされる労働騎士団の労働文化を分析し、のちに連邦移民局局長に転身するパウダリー団長に焦点をあてて、当時の労働運動が階級の連帯ではなく、ホワイトネスを核に人種の連帯を目指していったことを明らかにした。

第六章では、再建政治の終焉を受け連邦法が1880年代末から90年代に再強化される過程を国内政治の変容と、清朝との外交交渉の過程を検証することで明らかにし、こうした動きに清朝側が移民政策を転換(1893)し、駐米公使を通じた巻き返しにでた過程を明らかにした。さらに、アメリカ側にあっても、米西戦争後の帝國的拡大の中で、門戸開放推進派が排華法の問題に深くコミットし、最終的に中国でのアメリカ商品ボイコット運動を契機に、アメリカ国内の排華運動が鎮静化していくさまを描いた。

結語では、州レベルのローカルな圧力から連邦の排華移民法制定に至る過程を説明する、単線的な国内政治モデルの「カリフォルニア学説」(図7-1)では十全な説明たりえないとし、図7-2のように「中国人問題」に関与した米中両国の諸主体を浮かび上がらせ、世界的な奴隷解放運動や再建期の連邦政治、清朝側の外交などこの意思決定過程に加えられた様々な圧力を整理し検証を加えた。

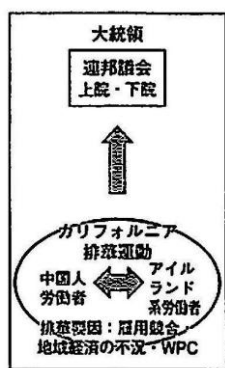


図7-1 カリフォルニア学説(国内政治過程モデル)

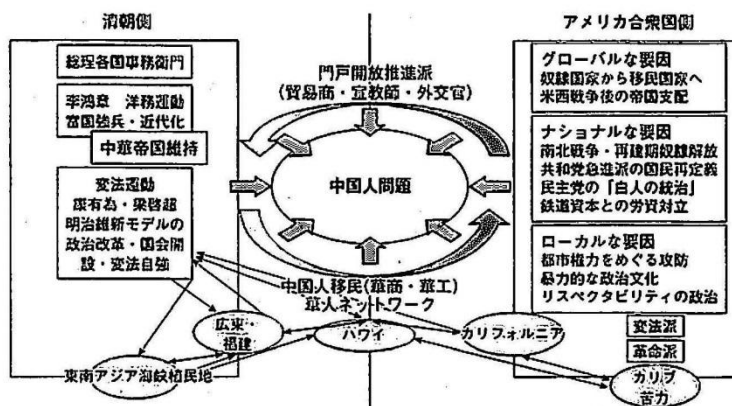


図7-2 本書の分析枠組み

「中国人問題」は単純な移民排斥事案ではなく、そこには米中両国の国益と不可分にリンクした外交・通商上の思惑が絡み合っていた。門戸開放推進派の中国市場開放の圧力、清朝側の帝国維持・延命のための移民問題の利用、「帝国」としてのアメリカの東アジア国際関係への介入など、これらが排華運動の発生から鎮静化の歴史過程に関わっていた。また、本研究では「中国人問題」が、グローバルな奴隷制廃止運動とアメリカ南北戦争という、二つの奴隷解放のモメントと深く交錯していることを明らかにした。19世紀の国際労働力移動を分析し、同時代の「自由」労働と「不自由」労働の選別認定がいかに英米主導で恣意的に決定されていたかを明らかにし、共和党政権の移民奨励策も、それが契約労働者まで「自由」労働者としてカウントする側面を持ってい

たことを明らかにした。また、奴隷解放後の再建期においても、連邦市民権概念のもとで新しい「アメリカ人」の境界創成が開始されたが、そこで「中国人問題」がサムナーら共和党急進派議員らの人種平等の政治の試金石となったこと、それが頓挫し再建政治の終焉とともに、1882年排華法が制定され非白人として中国人移民が人種化されることとなった。

最後に、「中国人問題」の歴史的意義として二つのことを論じた。一つは、中国人移民ほど「アメリカ人」の境界形成のポリティクスに激しく翻弄された移民集団はなく、彼らが再建期の国民国家編成、世紀転換期以降の帝國的秩序形成につねに象徴的に関与し、政治・社会秩序醸成の触媒の役割を果たした点であり、アメリカの近代社会秩序形成の差異化の政治でこの「中国人問題」を通じて無徴の「アメリカ人」的なるものが創出されたことを論じた。いまひとつは、「中国人問題」が移民国家アメリカを誕生せしめたという点である。従来のアンダーソンの想像の共同体論とは異なり、「想像」するだけでは国家は国家たりえず、行政上、国家が国民/外国人を文書で掌握することで初めて実質的な移民国家が誕生するとすれば、この排華法以降の移民行政こそが、実質的な移民国家アメリカの誕生を意味していた。アメリカは移民国家として「人類の避難所」としての自画像を抱いてきたが、「中国人問題」への対応を見る限り、移民国家誕生の現実はこの理想とはおおよそ異なるものであった。